

繁殖期におけるカイツブリのエサ生物について

風間美穂（きしわだ自然資料館）

カイツブリ *Tachybaptus ruficollis* は、生活の大部分を内水面の淡水環境に依存しており、ため池などの環境を評価する上でたいへん興味ある対象である。筆者は1997年から2004年までの間、岸和田市内のため池におけるカイツブリの営巣分布状況を調査し、面積や周辺環境・水深などの環境要因と、営巣数などの関係について考察してきたが、結論を出すには至っていない。そこで今回は、繁殖期におけるカイツブリのエサ生物について調査し、池内に生息する生物種が、繁殖要因のひとつとなりうるかどうかを考察したい。

調査は2004年の繁殖期に、大阪府岸和田市内で最大の水面面積をもつ久米田池（46,500m²）で繁殖するカイツブリを対象に行った。池は農業用水・養魚池のほか、一部ビオトープとしても利用され、水深は最大4m、周縁部にはヨシ・ジャヤナギ・アカメヤナギ・ヒメガマ・ガマなどが2002年より植栽され、現在のところは定着している。

水中および水面には、沈水植物であるコカナダモ *Elodea nuttallii* と、浮葉植物であるウキクサ *Spirodela polyrhiza* が2002年より優占し、カイツブリはこの2種の水草と、池に投棄されたビニール類などのごみをおもな巣材として利用している。2004年からはホテイアオイ *Eichhornia crassipes* も確認されたが、久米田池内では巣材としての利用は確認されていない（他の岸和田市内の調査池ではカイツブリ・バンの巣材として活用されている）。

池内に生息する魚類は、養魚用に移植されているタモロコと、体長20cm以上のカワチブナ（ゲンゴロウブナの一品种）が優占し、それらに対して定期的に給餌が行われている。その他の魚類では、ドジョウ・コイ・モツゴ・ヨシノボリ類を確認したが、ブルーギル・オオクチバスなどの外来種は、2004年の調査期間中は確認できなかった。甲殻類は、養殖されているスジエビのほか、アメリカザリガニが確認できた。その他の生物種は、ウシガエル（幼生・成体とも）・ヌマガエル（成体）、トンボの幼虫（ヤゴ）を確認した。

カイツブリの採餌行動についての観察は、双眼鏡とフィールドスコープを用いて行った。2004年6～8月の期間中、久米田池内には38つがいの繁殖が確認されたが、そのなかで、特に岸近くに営巣しているカイツブリの繁殖つがいを選択し、おもに親の採餌行動を追跡し、調査中に捕獲したエサの種類および数量、それをどの個体が食べたか（親・ヒナ）などを確認・記録した。同時に、各観察時の天候・気温・人の出入り・水の出入りなども記録した。調査の結果、カイツブリはタモロコ・モツゴのほか、ヨシノボリ・スジエビ・ヤゴ・アメリカザリガニ・ウシガエル（幼生）など、魚類に限らず、多様なエサ生物を採餌していることがわかったが、ヒナの成長およびヒナの数によって、エサ生物の種類ごとの割合は変化していることがわかった。